



Title	14世紀シエナにおける社会的変化をめぐって：マニャーティとポポロ
Author(s)	中山, 明子
Citation	AULA NUOVA イタリアの言語と文化. 2004, 4, p. 45-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93553
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

14世紀シエナにおける社会的変化をめぐって

— マニャーティとポポロ —

中山 明子

はじめに

中世シエナの政治の舞台で、一時期とはいえ主役の座にあったサリンベーニ家は、いわゆるマニャーティの家系である。筆者は以前に、A. カルニアーニの著作に基づき、このサリンベーニ家について、1355年のノーヴェ体制崩壊までの時代に限定して、社会的な立場や政治戦略についての紹介を行った⁽¹⁾。しかし、最後のサリンベーニ家の有力者が、シエナ領から追放されてフィレンツェ領に赴き、表舞台から姿を消すのは15世紀初頭である。むしろ、この一族のプロフィールにとって、14世紀後半こそがもっとも重要な時代と言えるかもしれない。

今回はしたがって、ノーヴェ体制崩壊後の時期について、引きつづきカルニアーニに依拠しつつ、サリンベーニ一族、特にその有力者の政治的な動きを辿る。そしてそれを、当時のシエナの社会的状況に当てはめて、都市の政治、あるいはコンタードとの関係において、どのような意味をもつのか検討したい。これがたとえ、諸事象の結果の確認であって、原因を探ることにはならないとしても、より絞りこんだ問題意識に基づく個別研究の前段階としては、一定の必要性があると考ええる。

ただし14世紀後半のシエナについては、その前後に比べて、まだ研究が進んでおらず、十分に紹介されてきたとは言いがたい。そのため、サリンベーニの挑戦について論じる前に、いくつかの点について確認作業が必要である。今回はまず、マニャーティと貴族の関係、そして「ポポロ」についての考え方を整理した上で、1355年から1368年までについて、特にサリンベーニと

「ポポロ」との関係に着目してみたい。

1. 13～14世紀のシエナ

1.1 社会、政治、経済の変化

中世シエナ史において、13世紀から14世紀にかけての時代は比較的、研究が進んでおり、都市の政治、社会、また経済についての考察がさまざまなアプローチで試みられ、蓄積されている時代であると言えるだろう。ただし、より正確には13世紀半ばから14世紀半ばまでと言うべきであり、前後の時代との連続性も、その重要性が叫ばれる割には解明されておらず、やや突出した印象を与えるのは事実である。とりわけ1370年代以降については、史料的な制約もあって研究が進まず、一種の空白期となっているのではないだろうか。

しかしながら、14世紀後半から15世紀初頭にかけての時期は、シエナの政治においてある意味で「最もドラマティックな時代」⁽²⁾であり、めまぐるしく主役が交代する中、都市社会のみならず周辺領域においても、大きな構造変化が起こっていたと考えられる。また周知のようにこの時期はいわゆる「危機の時代」と重なり、都市は、政治的・経済的・社会的にさまざまな困難に直面しなければならなかった。ただ一方で、単に危機の時代であったのではなく、後の回復期とのつながりの時期も含まれており、一種の調整段階であったという見方もある⁽³⁾。

こうした中で、13～14世紀、とりわけ14世紀後半のシエナにおける社会状況を把握し、そこで生じた変化を考察するには、前後の時代と切り離すことなく、むしろそれらとの連続性においてこの時期をとらえることが重要ではないだろうか。たとえそれが、やや概略的で、大ざっぱな見方にとどまるとしてもである。

その上でまず確認したいのは、G. ケルビーニによって示された、この時期のシエナの社会的変化の構図である⁽⁴⁾。彼はこの時代における長期的変化を読み解くためのキーポイントとして、次の2点に注目している。まず

「貴族性」概念の変化、そして都市民の商業・金融業に対する考え方の変化である。このため彼は、12世紀から16世紀という例外的に長い期間を射程にとらえ、その困難さを嘆きながらも、またこの変化が決して直線的なものではなかったことを強調しつつも、上記2点の問題を通して、ある程度すっきりと図式化された見方を示してくれている。

1.2 マニャーティと「貴族 (nobili)」

1355年3月25日、約70年にわたってシエナ政治の最高権力の座にあったノーヴェ体制は崩壊した。これは動乱の時代の幕開けであった。ところで、ノーヴェが商人による寡頭政であり、執政府のメンバーとなった者たちが自らを「中位の商人」と規定していたことはすでに明らかにされている。ただ「中位の商人」とは具体的にどのような者を指すのかと言え、その言葉から受ける印象とは異なり、社会の最上層たるマニャーティに次ぐ富裕層であったこともまた、すでに明らかとなっている⁽⁵⁾。実際、ケルビーニは彼らがいわゆる「ポポロ・グラッソ」、あるいは「大ブルジョワ」と呼ばれる階層であったと指摘している⁽⁶⁾。

一方、この体制を転覆させたのがマニャーティと「ポポロ」であったとされる。実際にどのような者が反乱に加わったのか特定することは難しいが、特定の集団の反乱というよりは、排他的性格をきわめるノーヴェに反感を持つすべての者が加わっていたという⁽⁷⁾。ノーヴェ体制下で政権に就くことができたのは、先述のように商業を営み、裕福でありながら、都市の伝統にとって有害な“マニャーティ的”要素を持たない、一握りの市民であった。マニャーティがこの政権から排除されていたことは有名であるが、同時に、公証人、裁判官、医者も含めて、商人以外のあらゆる職業が政権から遠ざけられ、アルテもまた、政治的な発言権を与えられていなかった。

ところでこの時期、つまり14世紀半ばのマニャーティは、前世紀に蓄積された莫大な資産、とりわけ周辺領域における領土によって、圧倒的な存在感を誇っていた。ノーヴェ体制期は彼らの黄金時代であったとも言われる。ま

た一方で、彼らの生活様式や考え方はあまりにも封建貴族、または「コンタード貴族」に接近してしまっていた。実際、この時期にあらわれる「貴族」と「マニヤーティ」は同義語と考えてよいという⁽⁸⁾。

ここで問題となるのは、「貴族」についての考え方であり、また「ポポロ」のとらえ方であろう。これが時代によってどのように変化していったのかを、ケルビーニの論に拠りつつ確認しておきたい。時代を遡って、13世紀初頭、都市政治のエリートたちによって貴族階級が形成されると、市民＝「ポポロ」の図式が崩れ、以後、半世紀以上にわたって「ポポロ (populus)」対「貴族 (milites)」の対立が続いていく。もちろん、グエルフイ対ギベッリーニの争いやコンタード貴族の都市への移住、ポポロと一部の都市貴族の結びつきなどがあり、事態は決して単純ではない。一方、13世紀はシエナ出身の国際商人たちの活躍の最盛期であり、こうした有力商人の中から、ポポロ出身でありながら、明らかに他のポポロとは異なる生活様式を志向する者たちが現れ始めた。その代表が、サリンベーニ、ボンシニョーリ、ピッコローミニ、トロメーイ等の家門の構成員であり、マニヤーティと呼ばれることになる。そして1277年の反マニヤーティ法の制定によって、マニヤーティは社会的階層として認定され、それまでの貴族 (milites) にとって代わり、今度は彼らが「ポポロ」、もしくは「ポポロ身分の者たち (popolari)」と対立する存在となるのである⁽⁹⁾。

マニヤーティの中には、前段階の都市貴族にルーツを持つ家もあった。たとえばマラヴォルティ、サルヴァーニである。記録上も「貴族系のマニヤーティ (casati di nobili) (*シエナでは通常マニヤーティではなくカサーティが使われる)」、「ポポロ系のマニヤーティ (casati di popolari)」と区別される場合もある。ただし、これは重要ではなく、マニヤーティはマニヤーティである。そして以前の貴族 (milites) とマニヤーティが決定的に異なるのは、マニヤーティは都市において、自ら社会的な階層を形成することがなく、政治的な組織を通じて発言権を確保しようとはしなかった。つまり、都市政治において、集団としては積極的な役割を果たそうとはしなかったという点で

ある⁽¹⁰⁾。さらに言えば、共通の利害によって結ばれた集団ではなく、むしろお互いに、常に私的な闘争を繰り広げていた。

マニャーティとはしたがって、政治的には非公式な呼び名であり、マニャーティが自分からひとつの階層としての自覚を持ったり、それを喧伝したりしたことは決してない。彼らはむしろ、他の市民（ポポロ）たちによってマニャーティと定義されたのであり、それはマニャーティがコンタート貴族に近づいていく過程で、都市の伝統に対する脅威が感じとられたためにほかならない。そして、彼らは実際に「貴族」と呼ばれるようになるのである。

またノーヴェ体制の成立というのは、ケルビーニによれば、ポポロ・グラッソが、自らをマニャーティと区別しつつ、同時に自分たちをより下層のポポロ（中・小ブルジョワ）からも切り離す瞬間である。これによって、「ポポロ対マニャーティ」の図式におけるポポロの一体性が、内部から損なわれることになる⁽¹¹⁾。マニャーティ自体も、世紀初頭に都市貴族に対立していた「ポポロ」から分離していったことを考えると、13世紀後半から、反マニャーティ法の成立と、大ブルジョワ商人階級の政府の樹立によって、いわゆる「ポポロ」階級の分裂が進んでいったことになる。反マニャーティ法の成立は、都市政治における「分水嶺」⁽¹²⁾と言われるが、実際、初期コムーネ時代のポポロ階級が、下位区分によって分離していく起点と考えられるのではない。

1.3 マニャーティとノーヴェ

ノーヴェ体制を崩壊させた反乱は、本来反目しあって、決して団結することのないマニャーティが、ただ一度、共通の目的のために立ち上がった機会であり、体制崩壊後は、すでにその一体性は失われていた。また、ポポロとの同盟関係も瞬間的なものであった⁽¹³⁾。ここで言うポポロとは、前述の状況からもわかるように、おそらく主に中・小ブルジョワであり、あるいはさらに下層の細民をも含む総体であるのかもしれない。

ところでケルビーニがもう一つ、シエナの社会的、政治的变化の指標とし

てあげているのが、「商人と権力」、あるいは商業と政治・政治権力との関係である。そしてノーヴェ体制が、おそらくシエナ史上もっとも明確に、商人と政治権力の結びつきを打ちだした体制であり、その成立期が、特に国際的規模における商業・金融業の最盛期と一致していることに注目している。

ここでもう一度、ノーヴェ体制成立以前、13世紀初頭に話をもどす。当時の都市貴族（*milites*）が選出した「商人のコンソリ」は、1220年代以降、本格的に組織としての活動を始め、政治的な役割をも担うことになる。そしてシエナ商業・金融業の隆盛期にその活動を支え、1340年代までは商人の利益を代弁する組織として、都市政治において強い存在感を示したのである⁽¹⁴⁾。

ところがノーヴェ体制崩壊後は、この商務局（*Mercanzia*）の役割が徐々に変化し、次第に、政治的にある一定の集団の利益代弁機関としての意味を失っていったという。これ以降はむしろ、商人たちの政治の世界における精神的・現実的より所としてではなく、より幅広い層に奉仕する公共機関としての色彩を強めていくことになる⁽¹⁵⁾。これはある意味では、この時期のシエナにおける商業の意味の変化の一端を示しているとも言えるだろう。

シエナの国際的金融業のピークは13世紀後半とされており、14世紀を通じて下降線をたどることになる。特にアヴィニョンにおいてシエナ商人の存在感は皆無に等しく、1380年代のナポリ王国におけるエピソードからも、完全にフィレンツェ商人に覇権を握られていたことがわかる。数少ない例外を除いて、もはや金融業者の市場は領域内にかぎられる状況となる。しかしながら市内においては、まだ商業はさかんに行われており、15世紀初頭までは、やはりシエナの中心産業は商業であった⁽¹⁶⁾。

変化が生じるのはおそらく15世紀後半である。この頃から、富裕層と商業が断絶し始める⁽¹⁷⁾。もともと都市内部において、個人の政治的権力の基盤となるのが、周辺領域における土地所有であり、14世紀初頭の所有財産表においてはマニヤーティが、都市内外、とりわけ周辺領域に集積した不動産は、圧倒的な規模に達していた⁽¹⁸⁾。しかし当時においては未だ都市の生活における商業活動の意味が大きく、マニヤーティにしても、やはり事業として商

業・金融業を営んでいた。また、彼らは社会の最上層でありながら、政権からは排除されていたのである。

一方、15世紀以降の変化は二重の意味で興味深い。1453年の資産評価(Lira)においてすでに、富裕層の主たる収入源は不動産であり、1509年においても同様である⁽¹⁹⁾。これは14世紀初めにはすでに明らかであった兆候が、さらに進行していったことを示す。そしてもうひとつ注目されるのが、15世紀後半から16世紀初頭における富裕層の中身である。この時期にはジェンティルオーミニと呼ばれるマニャーティ(の子孫)は没落が顕著である。代わって富裕層の中で覇権を握ったのが、いわゆるノヴェスキ、つまりノーヴェ体制下で執政委員を務めたメンバーの子孫である⁽²⁰⁾。

ケルビーニは特に、1509年の資産評価において、政治要職者の実際の職業が記載されていないことに着目する。つまりこれは、彼らは何らの事業も営まずに生活する「土地所有・地代生活者階層」であることが明白であったからであり、商業から切り離された新しいエリート階級が生まれていたと考えられる⁽²¹⁾。この時期において、「政治的指導層＝最富裕層＝大土地所有者階層」の図式が確立されることになり、ということは、その前には、商業と政治、また商業と貴族性の考え方についての大転換があったということになるだろう。

したがって、14世紀後半から15世紀初頭にかけての社会的変化は、上述のようなメンタリティーの変化とも密接に関係していたはずであり、特に15～16世紀からふり返った場合に、重要な転換点となるのではないか。ただし最初に述べたように、この時期は前後と比べると、十分に研究されてきた時代とは言いがたい。しかし明らかなこともある。それは、この時代に「モンテ」が形成され、これが15世紀以降のシエナの政治において、キーファクターになるという事実である。

1.4 ポポロとモンテ

ノーヴェ体制が崩壊すると、ノーヴェ時代に執政委員になった者やその家

族は、新しい政権の枠組みから除外された。それまで政治権力から排除されていた貴族（マニヤーティ）といわゆるポポロが中心となり、ドディチ政権が発足する。これは1368年まで続くが、体制初期に、市民によるカピターノ・デル・ポポロ制を導入して軍事制度をととのえ、アルテのプリオーリによる政治組織（Collegio dei Dodici Priori delle Arti）をつくって強い権限を与えた。ただし発足直後からコンタードのムーネの反乱に悩まされ、飢饉・疫病、そして傭兵隊の襲撃にも対処しなければならなかった⁽²²⁾。

ドディチ政権におけるポポロとは、おそらく「小ブルジョワとアルテの長」⁽²³⁾などによって構成されていたと考えられるが、マニヤーティの強いコントロール下にあり、1360年代初めには、マニヤーティの抗争の影響を受けて内部分裂してしまっていた。この時期はマニヤーティの政治勢力の絶頂期でもあったのである。

1368年4月には、メオ・トロメーイを筆頭にピッコローミニ、サラチーニ、チェッレターニ等のマニヤーティが反乱を主導し、ドディチ政権を崩壊させ、9月に貴族の執政府（Consolato nobile）をうち立てた。これは10人の貴族（マニヤーティ）と3人のノヴェスキからなり、貴族たちは、ノヴェスキや下層市民（ここではおそらくドディチに参加できなかったより下層のポポロ）に対して改革を約束したものの、反動的性格が強かった。そしてマニヤーティの中で、サリンベーニは一時的に勢力を後退させ、逆に伸張させたのがピッコローミニであった⁽²⁴⁾。

ところが、同じ9月に早くもサリンベーニがポポロと共に反乱を起こし、貴族の執政府は崩壊する。貴族は大挙して市外へ亡命し、ポポロは団結して貴族に対抗すべく、リフォルマトーリと呼ばれる議会を結成した。ここで言うポポロ（ポポラーリ）とは、ノヴェスキとドディチーニ（ドディチ参加者）、そしてそれ以外の下層民（ポポロ・ミヌート）である。貴族でありながら他の貴族に対抗したサリンベーニには報奨が行われる一方で、これ以降の改革はすべて、社会の最下層に向けて有利に進められていく⁽²⁵⁾。

12月にはポポロ・ミヌートが反乱を起こし、より自分たちに有利な改革を

認めさせるのに成功するが、ここでポポロ内部の呼称に変化が生じ、以後固定される。つまりノヴェスキが「もっとも数の少ないポポロ (Popolo del minor numero)」、ドディチーニが「中間の数のポポロ (Popolo del numero medio)」、ポポロ・ミヌートが「もっとも数の多いポポロ (popolo del maggior numero)」とされるのである⁽²⁶⁾。ここでは、ノヴェスキも含めて、マニャーティに対抗する意味でのポポロ階級出身者が、ポポラーリとしての一体性を確かめあったという事実だけでなく、そのポポラーリの中の数量的な内訳が、はからずも明らかになっていることが重要である。

この後、1369年のサリンベーニの反乱や貴族との和解、彼らの帰国、また1371年のブルーコの反乱を経て、ドディチーニが追放された上で、12人のポポロ (ポポロ・リフォルマトーリ) と3人のノーヴェからなるリフォルマトーリ政権が樹立された。1371年から1385年まで政権の座にあったリフォルマトーリは、たとえばノーヴェ体制のような排他的寡頭政とは対照的に、80%の執政委員が一度きりしかその役職に就かなかったとされ、同時代人から「民主的」⁽²⁷⁾ との名声を勝ちとることに成功した。ただしケルビーニも言うように、いかにこれがポポロ・ミヌート中心の体制であったとしても、この体制の崩壊時には、彼らよりもさらに下層のポポロがいたという事実からすれば、厳密な意味でポポロ的であるとか、民主的であるとか言うのには、やはり疑問符がつくところであろう⁽²⁸⁾。

そして、1368以降に行われた、社会のより下層に向かって政治的権利を広げる試みは、1385年、リフォルマトーリ政権の崩壊によって終わりを告げる⁽²⁹⁾。これは、チョンピの反乱制圧後のフィレンツェ政府の圧力がひとつの要因であったとされるが、階級闘争的に見れば、いわゆる「政治的退化の決定的瞬間」⁽³⁰⁾ である。1385年3月の代表議会には、ノヴェスキ、ドディチーニ、ポポロ (リフォルマトーリではないと考えられるので、さらに下層のポポロということになるだろう)、さらにジェンティルオーミニ (マニャーティ) が招集され、最高行政府の役人 (ノヴェスキ4人、ドディチーニ4人、ポポロ2人) はプリオーリと呼ばれることになった⁽³¹⁾。

これによって、すでに一部は形成されていた政治的な党派が、政権参加有資格者の世襲的派閥として確定され、機能していくことになる。もともとは課税基準額に基づく社会的区分に端を発していたこうした階層が、1400年代に入るとさらに政治的な色彩を強め、特にポポロの下位区分が発達して複雑な様相を呈し、この派閥争いが、シエナ政治を特徴づけることとなるのである。その党派（モンテ）とは、ジェンティルオーミニ、ノーヴェ（ノヴェスキ）、ドディチ（ドディチャーニ）、リフォルマトーリ、ポポロの5つである。ジェンティルオーミニとは言うまでもなくマニャーティの子孫、以下の4つは、それぞれ次の時代に同名の政権のメンバーとなった者、あるいはその子孫である。ノヴェスキ1287-1355年、ドディチャーニ1355-1368年、リフォルマトーリ1368-1385年、ポポロ1385年以降⁽³²⁾。

モンテの特徴は、まず、それが政治的権利に由来することで、しかもそれが世襲的権利となることにある。すなわちモンテ加入は家が単位であり、モンテ加入者が各モンテ間の争いをくり広げながらも、最終的には、5つのモンテ全体で政治的特権階級を形成する結果となった。残りの市民は、いかなるモンテにも加入せず、プレーベ（plebei）と呼ばれる。逆にジェンティルオーミニの家で、いずれかのモンテに属さないものはひとつもない⁽³³⁾。まさに、モンテ加入が政治的特権をもつことを表す、よい例である。

モンテ、あるいはモンテ間の争いは、15世紀以降のシエナの政治を混乱させる元凶と考えられ、内部からも廃止の試みが持ちあがったほどである。しかし解決には至らなかった。結局、16世紀にシエナがメディチ大公国に併合されるまで生き残り、大公国編入時には、モンテ加入者が都市貴族階級を形成していたのである⁽³⁴⁾。これは、再び貴族性についての考え方が変わったことを示していると言えるだろう。

つまり、16世紀における貴族階級とは、伝統的に市政参画の権利を有している家柄のことを指す⁽³⁵⁾。ただし、どの時点でその権利を獲得したかは問われない。たとえばキージのように、14世紀後半以降にポポロ・ミヌートから上昇して、国際商人として活躍し、最富裕層に仲間入りした家もあっ

た⁽³⁶⁾。14世紀を通じて政体がさまざまに変化する中で、新しくこの権利を勝ちとる可能性は開かれていたが、やはりポポロ・ミヌートにとっての道は険しく、モンテの中でも、ノーヴェ・ジェンティルオーミニとリフォルマトーリ・ポポロの間には、資産額に大きな隔たりがあった⁽³⁷⁾。そして、1385年以降は、既得権を持つ集団（すでに政権参加し、その後の市政に参画する資格を得た者たち）が、それ以外の者に対する権利の付与を拒否し、社会の固定化が進行することになる。

また一方1374年以降は、ほぼ半世紀を費やす対サリンベニ戦争が断続的に行われた。対アルドブランデスキ戦争よりも困難だったと言われるほどの労苦をとめない、15世紀初頭、ついにシエナの都市コムネは、サリンベニの勢力をコンタードから一掃した⁽³⁸⁾。サリンベニは極端な例であるとしても、旧マニャーティである貴族（ジェンティルオーミニ）の凋落は顕著になりつつあった。代わって勢力を伸張したのがノヴェスキであり、実際、16世紀に入るとシエナの貴族階級を代表していたのはノーヴェであった⁽³⁹⁾。

ここでもう一度、時代を遡って貴族性の考え方について確認しておきたい。14世紀半ば過ぎに政治的な絶頂期を迎えるマニャーティは、多くが初期コムネ時代のポポロから発していたにも関わらず、自らの出自をより古く装った。しかしながら他の市民にとってこれはそれほど重大な問題ではなく、それぞれ家門を形成する富裕層であるというだけで十分だった。実際、彼らはマニャーティを貴族と呼んでいたのである。つまり、13世紀後半以降、マニャーティが貴族となる過程では、「貴族であるには裕福であること」⁽⁴⁰⁾が必要条件だった。その資産がどのような手段で蓄えられたものであるかは、問題にならなかったのである⁽⁴¹⁾。後の時代から見れば、ここで、まずひとつ目の貴族性に対する考え方の変化が起こっていることになるだろう。またこれが、富裕層によって商業が活発に行われ、政権側も、商業を営む者に最大限の配慮を行った時代と一致していることは注目される⁽⁴²⁾。

ただ一方で、こうした状況にもかかわらず、マニャーティはやがて、その資産、特にコンタードの領土が父祖伝来であるかのように装い、商業や金融

業（事実上の高利貸）によって蓄積されたという事実を隠蔽しようとするようになる⁽⁴³⁾。しかし、これが商業に対する市民の考え方の変化と直接結びつくのかどうか、まだ断言するつもりはない。“市民の商業に対する考え方”と一口に言っても、市民とは誰か、商業とは何を指すのか、そもそも職業とは何か、といったような問題は非常に多くの論点を含むものであろう。メンタリティーやイデオロギーの変化というような問題になれば、筆者はまだとてもそれについて語る状況にないし、宗教との関わり、特にカトリックの教義との関係に就いても、無視してかかるわけにはいかないはずであるが、困難な課題である⁽⁴⁴⁾。

ただその上であえて言うならば、彼らがすでに主役ではなくなった15世紀後半以降、富裕層と商業の乖離が顕著となるが、やはり真っ先に商業との関わりを断ち切ろうとしたのがマニャーティであり、その萌芽はすでに14世紀前半に芽生えていたと言えるのではないだろうか。そしておそらく14世紀半ば過ぎから、商業や金融業そのものに対する考え方の変化とともに、所有権やその世襲に関する考え方にも、大きな変化が生じ、15世紀から16世紀にかけての、再度の貴族性の認識の変化につながったのではないだろうか。

ところで、ノーヴェ以後の政権は、コンタードのコントロールや外交（フィレンツェとの関係）において、やはり非力であったとの印象が否めない⁽⁴⁵⁾。ポポロ、あるいはポポロ・ミヌート政権の限界と言うこともできるかもしれないが、一方で、この時代特有の事情も考慮しなければならないだろう。シエナについては、まだ実証的に十分確認されたとは言えないのだが、やはりペストを契機とする大幅な人口の減少が、コンタードの様相を一変させ、都市のコンタード政策に大幅な変更を強いたことは、容易に想像できる⁽⁴⁶⁾。またフィレンツェの覇権自体も、両都市の経済的競争力、人口規模だけをとっても14世紀の初めと終わりでは、その差がますます広がり、圧力が比べようもないほどに大きくなっていったのは明らかであろう。ただし、この点の詳しい考察は、別の機会に譲りたい。

2. サリンベーニの悲願

2.1 ジョヴァンニ・ダニョリーノ・ボットーネ、家門の絶頂期

1355年3月のノーヴェ体制崩壊から1368年8月まで、争乱期の都市において、重要事件の背後に常に、ある人物の姿があった。サリンベーニ家のジョヴァンニ・ダニョリーノ・ボットーネである。おそらく多くの年代記においてサリンベーニ家のイメージを代表しているのが、このジョヴァンニなのではないだろうか。野心家で、皇帝カール4世の腹心。絶大な権力を誇り、常に諸家門間の憎悪をかき立て、争乱を引き起こしていた⁽⁴⁷⁾。

1355年といえば、すでにサリンベーニはシエナ南方に一大勢力圏を形成し、「コンタードの領主 (signore)」となっていた⁽⁴⁸⁾。ジョヴァンニの頭の中に、シエナの領主を目指す考えがあったのかどうか、確かめることはできないが、カルニアーニは彼の行動の中にその意志を読みとっているようである。約1世紀半にわたる、サリンベーニ家の発展と都市における挑戦の歴史において、その絶頂期に、家門の中でも抜きんできた権力を保持し、個人としては、「シエナの領主」にもっとも近づいた人物だった。

ジョヴァンニが最初に史料において注意を引くのは、ノーヴェ体制下の1345年、所はオルヴィエートである。この時、ジョヴァンニは父、アニョリーノ・ボットーネの代理として短期間ではあるが、オルヴィエートのカピターノ・デル・ポポロを務めている。モナルデスキのシニョリーア政下にあったオルヴィエートは、1345年8月、市内の混乱に際し、評議会でシエナ人カピターノ・デル・ポポロを招く決定をした。それがアニョリーノ・ボットーネであった。彼を呼んだのはレオナルド・ディ・ラヌッチョ・ディ・メッセル・シモーネとペトルッチョ・コンテ。2人はアニョリーノの友人で、特にレオナルドは彼と姻戚関係にあったという⁽⁴⁹⁾。

軍隊をともなってオルヴィエートに入城したアニョリーノは、ベネデット・ディ・ボンコンテ、オルマンノ・ディ・ベラルドと、ジョヴァンニ・モナルデスキの間に和平協定を締結させた。しかし翌年2月、今度はレオナルド・ディ・メッセル・シモーネとベネデット・ディ・ボンコンテが反乱を起こす。

この時のかけ声は「ポポロ万歳、カピターノ（アニョリーノ・ボットーネ）万歳」であったという。この後、レオナルドとベネデットは揃って都市のシニョーリとなるが、ほどなくしてこの2人の間にも争いが生じる。結局、同じ2月に新たなるポポロの反乱によって、カピターノとその支持者は、市からの撤退を余儀なくされた⁽⁵⁰⁾。

このエピソードは、結局オルヴィエートを追われる結果になったとはいえ、アニョリーノ、ジョヴァンニ父子の政策にとって、重要な時点である。というのも、彼らは一貫してレオナルドに加勢したが、年代記は、それを彼らが「ギベッリーニ党についた」と記しているのである⁽⁵¹⁾。サリンベーニが、ギベッリーニかグエルフイかというのは、一言で片づけられない問題で、時期によって異なるとしか言いようがない。たとえば、1260年のモンタペルティ戦争に際しての、戦費の貸し付けは、ギベッリーニ政府に対するものであったが、これがただちに、サリンベーニとギベッリーニの結びつきを示すことにはならないはずである。むしろ、前章で見たような社会的変化を考慮すれば、分化以前のポポロの一体性や、フィレンツェに対抗するシエナの、都市の理想や一体性という観点から説明されるべき行為なのではないだろうか。ただしカルニアーニなどは、ここからさらに一歩進めて、これをサリンベーニ家の政治戦略の転換点として注目している⁽⁵²⁾。

そして、ジョヴァンニ・ダニョリーノ・ボットーネにとってオルヴィエート滞在は、彼のまぎれもない親皇帝路線の、公式な開始時点なのである⁽⁵³⁾。つまりこれ以降は、サリンベーニを、トスカーナにおけるギベッリーニの盟主とする見方に問題はないと思われるし、父の死後はジョヴァンニをシエナにおける皇帝党の党首と見なしてさし支えないと思われる。

1340年代はノーヴェが政権の座にあったが、政権自体が排他的である上に、経済状況の悪化や飢饉によって、すでに体制への不満は増幅され、頂点に達していた。しかしながら、有力マニャーティ同士の争いや、マニャーティと下層民の団結の難しさなどによって、体制転覆が現実味を帯びるには至らなかった。さらにペストの襲来は、一時的にマニャーティと下層民の結託を生

じさせたが、ノーヴェの権威を失墜させるには十分だったものの、体制の崩壊にはなお、10年以上が必要だった。むしろ決定的だったのは、皇帝カール4世の来伊である⁽⁵⁴⁾。

戴冠式のためイタリアにやって来たカール4世は、自らの意向とは別に、諸勢力から解放者として歓迎された。ノーヴェも内政上の問題を自覚し、政権の未来を案じて、ピサ滞在中の皇帝に使節を送った。その中にはもちろん、皇帝の信頼の厚いジョヴァンニ・ダニョリーノ・ボットーネの姿があった。そして、1355年3月23日、皇帝はシエナに到着。サリンベーニ邸に迎えられた。そのとき突然、反乱の声があがったのである。「皇帝万歳！ノーヴェに死を！」の第一声はピッコローミニが発したという。他のマニャーティも追随し、下層民も武装して従った。25日にかけて、市内の緊張は高まる一方であった⁽⁵⁵⁾。

この時の反乱主導のマニャーティの中に、サリンベーニはあげられていない。むしろ、皇帝も、またジョヴァンニも、当初は躊躇したと言われているほどである。そしてそれは、突発的な反乱と、統率を失った群衆を前に、本当に信頼できる同盟相手なのかという迷いがあったからと解釈されている⁽⁵⁶⁾。しかし最終的には、彼らも意を決した。市庁舎前のカンポ広場には群衆がつめかけ、ノーヴェは孤立していたが、やがて、総辞職と政権放棄を余儀なくされた。ノーヴェ体制崩壊の瞬間である⁽⁵⁷⁾。

この後、カール4世はマニャーティと下層民による特別委員会が任命されると、弟のニコロを代官としてシエナに残し、ローマへ向かった。皇帝は4月に再びシエナへ戻り、ドディチ政権が誕生する。同時に、多くの者に気前よく封土の承認や、騎士身分の授与が行われた。ジョヴァンニもまた、ティンティンナーノ、リーパ、バーニョ・ヴィニョーニ、モンテネーロについて、付随する領土とその裁判権、世襲相続権を承認されている。オルチャー帯における家門の存在が、皇帝の権威によって公式に承認され、サリンベーニのコンタードにおけるシニョリーア志向はますます強まった⁽⁵⁸⁾。

そしてここで重要なのは、彼らがすでに獲得した権利の、世襲相続が認め

られたということだろう⁽⁵⁹⁾。マニャーティはすでに、市民たちから事実上の貴族として認められていたが、彼らの権利が子孫に譲られることに正統性はなかった⁽⁶⁰⁾。それがこれ以降は、すでに実質的に獲得していた権利の、その世襲権までもが承認されたのである。この世襲権と、特にコンタードにおける所有の概念の変化などを組み合わせれば、社会的にひとつの大きな転換点にさしかかったと言えないだろうか。その後の、商業・事業に対する考え方の変化を思えばなおさらである。

5月8日に皇帝はシエナを出発。26日には、弟の代官も権利を放棄してシエナを後にした。市内の混乱は続くが、この間の事実関係を確認するのは、残念ながら現段階では不可能である。ただひとつ言えることは、「暴動は常に皇帝党によって起こされ、その先頭にはジョヴァンニ・ダニョリーノ・ボットーネがいた」⁽⁶¹⁾ということである。

手を結んでノーヴェ体制を崩壊させたはずのマニャーティと下層民 (popolari) であったが、実はまったく異なる存在で、利害が一致するはずがない。ドディチ体制最初期の改革も、2つの勢力の間で揺れ動いた。まず、下層民 (popolari) の中から12名が選出され、執政府 (Ufficio) を構成することになる。ドディチの名称は、この人数に由来する。ここからは前政権に参加した者、その息子、兄弟、親戚は排除される。つまりポポロ・グラッソの閉め出しである。一方、貴族 (マニャーティ) の中から選ばれた12人は、別の組織コッレージョ (Collegio) を構成し、ドディチと一緒に討議することが定められた⁽⁶²⁾。

一見、この時点での「改革者」たるマニャーティと下層民が協力しあって、ひとつの改革を成功させたように見えるが、実はまだ調整段階であり、マニャーティに対してより大きな権限が認められていたため、下層民にとってこの状況の受け入れは困難であった。たとえば、ドディチよりもコッレージョの方により上位の決定権があったし、コッレージョのメンバーとなった貴族には、市庁舎に滞在する義務が免除され、自身の館に留まることが許されていたのである⁽⁶³⁾。

こうした中で、皇帝の代官が去ると、当初は隠れていた下層民とマニャーティの対立が表面化する。6月9日、サリンベーネ・ディ・ネーリの動議による大評議会の議決によって、貴族のコッレージョは解散された。伝統的には、このコッレージョの廃止にマニャーティの危機の兆候、さらに言えば、その弱体化の最初の兆候をみとめる見方がある⁽⁶⁴⁾。少なくとも、ノーヴェ打倒の際に生まれたマニャーティの一体性は失われた。そして、年代記によっては、その責任をジョヴァンニ・ダニョリーノ・ボットーネに負わせている。全権力を自らの手中に収めるため、コッレージョを廃止させ、反マニャーティ市民戦争を煽動したというのである⁽⁶⁵⁾。

カルニアーニの場合、マニャーティに対して、コッレージョの廃止という権利の喪失をある程度まで埋め合わせる条項が可決されていることを強調し、いかに有力人物であっても、ただ1人の人物に責任を帰すことはできないと述べ、マニャーティの脅威は続くことを確認した上で、6月9日から11日にかけての改革は、マニャーティと下層民との断絶を表すのではなく、権力の再配分であるとの見方を提示する⁽⁶⁶⁾。しかし彼女にしてもやはり、マニャーティはノーヴェ打倒の反乱を起こすに際し、率先的役割を果たしながら、結局、後半（代官出発後）の改革によって、政治権力の一部を失ったのは事実であるということは、認めている。彼らが得たものは、コンタードにおける絶対的な支配権と、ディフェンソーリ（貴族だけが委員になれる司法組織。財務局長官、税務部責任者らとともにオルディニを構成する）を通じての都市での発言権であった⁽⁶⁷⁾。

またカルニアーニの規定では、ドディチ政権における下層民（popolari）とは、「中～上層ブルジョワ」⁽⁶⁸⁾とされている。ただし彼らの政治的権利は、「ドディチと手工業組合を通じて」⁽⁶⁹⁾行使された、あるいはマニャーティが失った権利は「アルテ代表者の手に渡った」⁽⁷⁰⁾などと述べていることから判断して、この下層民（特にドディチーニ）の実体をアルテ、あるいはその上層部に見ているようである。つまり、ポポロ・グラッソを除いたブルジョワ階級ということになるだろうか。また「小アルテ」⁽⁷¹⁾という言い方も使って

いるが、シエナの手工業やアルテについては、まだよく知られていないことも多く、筆者自身も現時点では、これについてさらに論じる状態にない。

ドディチ体制が、マニャーティのいわゆる傀儡政権であるという見方についてはすでに述べた。やはりポポロ・グラッソを排除するにも、その後の政権運営についても、マニャーティの力を借りずには何もできない状態であったのは、事実だろう。ドディチ政権当初は、収支が改善するが、その後はやはり、飢饉と疫病、傭兵隊の襲来に悩まされ、コンタードのコムーネの反乱への対応にも追われることとなる。こうした中、政権奪取直後から1359年まで続く一連の反乱において、その鎮圧に大きな役割を果たしたのが、ジョヴァンニ・ダニョリーノ・ボットーネであった⁽⁷²⁾。1356年、グロッセートを服従させ、1358年には、シエナのカピターノとしてキウージを占領。1359年から1360年かけては、モンタルチャーノの制圧に従事した。ジョヴァンニはその政治的勢力の絶頂期を迎え、当然のことながら、他の勢力にとっては、脅威と嫉妬の的となった⁽⁷³⁾。

1362年、彼はドディチ解任を謀ったとして、5年間の追放を言いわたされた。謀反の企て自体が事実であったのかどうかはわからない。カルニアーニは、多分に党派争いの的で不当なものと述べている⁽⁷⁴⁾。しかしながら、1年もたたない内に、国庫窮乏のため、亡命者は3000フィオリーニの支払いによって、召還された。ジョヴァンニの権力、特にその軍事力はいよいよ強大となり、1364年、モンテプルチャーノを奪取する。今や彼は、オルチャのみならず、モンテプルチャーノにおいても領主となったのである⁽⁷⁵⁾。

コンタードにおけるサリンベーニの存在感は圧倒的であった。ただし、都市における権力はまだ絶対的ではなく、政治を牛耳るには後一步というところであった。こうした中でドディチ政権の内部は、サリンベーニ派のグラッセリと、トロメーイ派のカネスキに分裂して相争う状態になっていたが、1368年、ここにカール4世が再び来伊。新たな争乱の呼び水にならないはずがなかった⁽⁷⁶⁾。

皇帝カール4世とサリンベーニの親密な関係、とりわけジョヴァンニが享

受した皇帝の信頼感と一種の友人関係は、ライバル家門の有力者や、それに連なる政権参加者の不安をかき立てた。マレンマの穀物取引に由来する莫大な富、周辺の領主家系と注意深く結ばれた姻戚関係、オルチャー帯の領主権と増大する軍事力。さらに皇帝再訪の機会をとらえれば、都市の実権を握るのも夢ではなかったはずである⁽⁷⁷⁾。

6月、シエナが皇帝滞在中のフィレンツェに送った使節団の中には、やはりジョヴァンニの姿があった⁽⁷⁸⁾。彼の、というよりもサリンベーニの、永年にわたる悲願が達成されるのは時間の問題かと思われた。実際、彼は栄光に満ちてフィレンツェから帰国。おそらく今回も、自身の館に皇帝を迎えるべく、歓待の準備をしていたはずである⁽⁷⁸⁾。

ところが、悲劇が待ち受けていた。そして彼の夢も、あっけない結末を迎える。1368年8月2日、300人の騎士を従え、ロッカ・ドルチャに向かう途上、ジョヴァンニの乗っていた馬が、どういうわけか暴れだし、彼をふり落とした。そして富と権力の絶頂にあったジョヴァンニ・ダニョリーノ・ボットーネは、そのまま意識を取り戻すことなく、永遠の眠りについたのである⁽⁷⁹⁾。

2.2 サリンベーニとポポロ・ミヌート

ジョヴァンニが落馬事故で没した後、市政は混乱した。9月2日には早速、マニャーティがドディチを排除し、ポポロ・グラッソとポポロ・ミヌートに改革を約束し、貴族政府（Consolato nobile）を樹立した。いったん、ジョヴァンニによって達成間近だったサリンベーニの悲願は頓挫したかに思えたが、彼の政策の継承者、サリンベーニ家のニッコロ・デイ・ニッコロが反撃に出る。彼は貴族政府の一員でありながら、反対勢力の代弁者でもあったのだ。ニッコロは皇帝に使者を送り、皇帝は要求に応じて、代官としてマラテスタ・ウンガロ・デイ・マラテステイ・ダ・リミニを派遣した⁽⁸⁰⁾。

9月23日、サリンベーニは「ポポロ万歳、皇帝万歳」と叫んで反乱を起こした。マニャーティは武装して抵抗したが、結局マラテスタの軍勢に屈し、

貴族政府は崩壊する。マニャーティはコンタードのカステッロに引き揚げ、市内では、一時的に団結するポポロの一体性を利用して、いわゆるリフォルマトーリ議会が誕生した。これに参加したのがノヴェスキ、ドディチーニとポポロ（リフォルマトーリ）であった。実はこの時点で、サリンベーニ家の悲願は、これまでになく実現性を帯びた⁽⁸¹⁾。

10月1日、リフォルマトーリは市庁舎に集まり、他の貴族に敵対して今回の反乱に加わったサリンベーニに、コンタードの重要な6つのカステッロ⁽⁸²⁾を譲渡した。他のマニャーティに対して圧倒的な優位に立ち、政府との良好な関係を確保したサリンベーニにとって、最後に政権そのものにねらいを定める時がきたのである。

この時期は一方、「最大多数のポポロ」たるポポロ・ミヌートが、あくなき政治的権利の追求に邁進しており、貴族政府崩壊後の改革によって、ついに最高行政府にのぼりつめた。貴族政府の打倒は、サリンベーニの加担なくしては不可能であったが、彼らが実際に権力の座に就くと、もはやサリンベーニが自身の政治的野心のためにポポロ・ミヌートを利用するのは難しくなった⁽⁸³⁾。しかしサリンベーニはまだそれに気づかず、反乱を起こしてみても、身をもってそのことを知る。

12月22日、カール4世が再びシエナにやって来た。やはりサリンベーニ邸に迎えられた。そして都市が明けて1月18日、ニッコロ・ディ・ニッコロは支持者とともに、「ポポロ万歳」と叫んで、反乱を起こした。攻撃の矛先はノヴェスキに向けられていた⁽⁸⁴⁾。リフォルマトーリ議会（これをもとに後に同名の政権が誕生する）は、ノヴェスキ、ドディチーニ、ポポロ（リフォルマトーリ、この時点でのポポロ・ミヌート）から成っていたが、ドディチーニはライバル家門の支持者を含むにせよ、やはりサリンベーニのもっとも心強い味方であった⁽⁸⁵⁾。そこでサリンベーニは、彼らと結んでノヴェスキを排除し、皇帝とともに都市を手中に収めようと目論んだのである⁽⁸⁶⁾。「ポポロ万歳」と叫べば、ポポロ・ミヌートも同調すると考えたのであろう。

しかし、すでに都市の政治に参画する権利を得たポポロ・ミヌートは、サ

リンベーニの筋書きに従うことなく、逆に、自らの既得権を守る方を選んだのである。すべてポポロ・ミヌートで構成された当時の最高立法府（Difensori del Popolo di Siena）のメンバーは、反乱者に同調することなく、抵抗して戦った。サリンベーニと皇帝軍は敗退し、1月25日に皇帝はシエナを後にした⁽⁸⁷⁾。

このサリンベーニの挫折の原因のひとつは、都市の権力を目指す中で、“ポポロの味方”というイメージを保ちつつ、ポポロ・ミヌートをうまく利用するはずだったのが、肝心なところで、彼らの意図、あるいはその動きを読み誤ったというところにありそうである⁽⁸⁸⁾。カルニアーニはむしろ、結果的にはポポロ・ミヌートの方が、サリンベーニの野心をたくみに利用したという。まさにサリンベーニに従順な顔をして、守護者として仰ぎ、譲歩を重ねて期待を抱かせつつ、最後の最後になって、すでに手にした権力を手放すことを拒み、サリンベーニのもくろみを、ものの見事にうち砕いたのである⁽⁸⁹⁾。

残されたのはしかし、既得権を守ったものの弱体化した政府であり、亡命している貴族との和解は急務であった。この和解のためにはフィレンツェも使節をさし向けたという。最終的には7月24日、貴族たちは帰国し、6ヶ月後大評議会にも復帰した。体制的には大きな変化はともなわず、ただサリンベーニの影響力だけは著しく減少した⁽⁹⁰⁾。

*本来この章は、「2.3 ブルーコの反乱」、「2.4 最後の当主、ニッコロ・ディ・チョーネ・ディ・サンドロ（通称「コッコ」）」と続くべきであり、1370年以降の考察に至っていないが、今回はここまでにとどめ、別の機会を待つことにしたい。

おわりに

上記のように、サリンベーニ家とシエナの都市コムーネの関係は、この後もさらに続いていく。その中で、ポポロとの関係も継続するのであり、さらに考察しなければならない点が多々ある。第2章でふれたサリンベーニとポ

ポロ・ミヌートとの関係は、特により詳しい分析が必要であり、そのためには、シエナのアルテとその活動についての情報が欠かせない。これはブルーコの反乱の考察にとっても、重要な問題である。

さらに、この後いよいよ、サリンベーニは対コムーネ（シエナの都市コムーネ）戦争に突入する。最終的にサリンベーニが都市コムーネに屈する際には、都市コムーネは、サリンベーニが領主権をもつコンタードの諸コムーネに働きかけ、対サリンベーニ蜂起を促したとされる⁽⁹¹⁾。このような形で都市がコンタードを「再征服」した結果として、コンタード内に例外的な特権を享受する共同体が散見されるという状況が生まれ、その後の都市とコンタードの関係に大きな影響を及ぼしたと考えられる⁽⁹²⁾。あるいはこれが遠因としては、ノヴェスキの社会的上昇を助ける状況を作りだしたのかもしれない。この場合しかし、カステッロにおける領主権や、コンタード住民との社会的関係、また法的権利関係についての確認が不可欠である。

以上のようなことは、1370年以降のサリンベーニの動向とともに、再度検討する機会をもちたいと考えている。

註

- (1) 拙稿、「サリンベーニとトロメーイー閥族、及び都市における反閥族規定の意味をめぐって―」、『AULA NUOVA イタリアの言語と文化』第3号（大阪外国語大学イタリア語研究室、2001年）所収、1～21頁。今回は、当時の体制や政治的党派を表す用語は、ほとんどすべてカタカナ表記を用いた。多くは翻訳可能な言葉であるが、訳語が一定せず、時代状況としても複雑であるため、現段階ですべて日本語に訳した場合、かえってわかりにくくなると判断した。また、それに関連して、今回は「閥族」の代わりに「マニャーティ」を使用している。
- (2) A.K.Isaacs, *Magnati, comune e stato a Siena nel Trecento e all'inizio del Quattrocento*, in *I ceti dirigenti nella Toscana tardo comunale*, Firenze, 1983, (pp.81-96) p.82. また以下も参照。A.Carniani, *I Salimbeni. Quasi una signoria. Tentativi di affermazione politica nella Siena del '300*, Siena, 1995. 石鍋真澄、『聖母の都市シエナ。中世イタリアの都市国家と美術』、吉川弘文館、1988年。池上俊一『シエナー夢見るゴシック都市』、中公新書、2001年。同、「13～14世紀シエナの社会的結合関係」、樺山紘一編、『西洋中世像の

革新』所収、刀水書房、1995年、279～301頁。M.モラ・Ph.ヴォルフ、瀬原義生訳、『ヨーロッパ中世末期の民衆運動－青い爪、ジャック、そしてチオンピーー』、ミネルヴァ書房、1996年。

- (3) Isaacs, *op.cit.*, p.82.
- (4) G.Cherubini, *I mercanti e il potere*, in *Banchieri e mercanti di Siena*, Roma, 1987, pp.161-220.
- (5) cf. W.M Bowsky, *Un comune italiano del Medioevo.Siena sotto il regime dei Nove 1287-1355*, trad. di S.Epstein, Mulino, 1986. ID., *Le finanze del Comune di Siena 1287-1355*, trad. di K.Isaacs e G.Salinas, Firenze, 1976.
- (6) Cherubini, *op.cit.*, p.178.
- (7) Carniani, *op.cit.*, p.215.
- (8) Cherubini, *op.cit.*, p.182. cf. R.Mucciarelli, *I Tolomei.Banchieri di Siena. La parabola di un casato nel XIII e XIV secolo*, Siena, 1995. 前掲拙稿、1～6頁。
- (9) Cherubini, *op.cit.*, pp.175-180..
- (10) ID, *op.cit.*, pp.180-181.
- (11) ID, *op.cit.*, pp.178-179.
- (12) G.Piccinni, prefazione di Carniani *cit.*, pp.7-12.
- (13) Carniani, *op.cit.*, p.216.
- (14) Cherubini, *op.cit.*, pp.175-178.
- (15) ID, *op.cit.*, pp.214-215.
- (16) ID, *op.cit.*, pp.168-170.
- (17) ID, *op.cit.*, p.204.
- (18) Carniani, *op.cit.*, p.113-183. cf. Isaacs, *cit.*
- (19) Cherubini, *op.cit.*, p.206-207.
- (20) ID, *op.cit.*, pp.205-207.
- (21) ID, *op.cit.*, pp.163-170.
- (22) Carniani, *op.cit.*, p.218-223.
- (23) Cherubini, *op.cit.*, p.195.
- (24) Carniani, *op.cit.*, p.239.
- (25) ID, *op.cit.*, p.240.
- (26) ID, *op.cit.*, p.246. Cherubini, *op.cit.*, p.197.
- (27) Carniani, *op.cit.*, p.249. ただし同時代人といっても厳密には少し後の時代である。
- (28) Cherubini, *op.cit.*, p.200.
- (29) Carniani, *op.cit.*, p.257.

- (30) *ibidem. cf. Cherubini, cit.*
- (31) *ibidem.*
- (32) Cherubini, *op.cit.*, p.201.この5つのモンテの内、ジェンティルオーミニ以外、すなわちノーヴェ、ドディチ、リフォルマトーリ、ポポロがモンティ・ポポラーリと呼ばれる。cf. M.Ascheri, *Il Rinascimento a Siena(1355-1559)*, Siena, 1993, p.32.「ポポロ」と「ポポラーリ」との使い分けについて、筆者はまだ十分に整理できていない。(5つの)モンテの総称としてモンティ・ポポラーリが使われているケースも多いように思う。特に14世紀後半について論じられる際にこの傾向が強く、マニャーティはこの段階ですでに階層として貴族と認定されていたので、ジェンティルオーミニは他のモンテとは異質だったということなのか。またモンテの内、ひとつの名称が「ポポロ」なので、混乱する面もあるのかもしれない。少なくとも14世紀には、マニャーティに対置されるのは「ポポラーリ」ということになるかと理解している。また、ある面では、「モンテ」は日本語の意味感覚からすれば、「党」「派」よりもむしろ「階級」「階層」ととらえた方が理解しやすい部分が多いと思うが、後にサリンベーニに勝るとも劣らないマニャーティ家系ピッコローミニが、政治的理由でポポロのモンテに編入されていることなどからして、事態はそれほど単純ではない。なお、「ポポロ」と市民の関係、及び16世紀における貴族性との関連から、以下も参照。ジョルジョ・スピーニ、森田義之・松本典昭訳、『ミケランジェロと政治。メディチに対抗した《市民＝芸術家》』、刀水書房、2003年、7～12頁。
- (33) Cherubini, *op.cit.*, p.203.
- (34) ID, *op.cit.*, pp.195-215.
- (35) *ibidem.*
- (36) *ibidem.*
- (37) *ibidem.*
- (38) Carniani, *op.cit.*, pp.269-279.
- (39) Cherubini, *op.cit.*, p.212. cf. Isaacs, cit.
- (40) Cherubini, *op.cit.*, p.182
- (41) *ibidem.*
- (42) cf. Isaacs, cit.
- (43) Cherubini, *op.cit.*, p.182.
- (44) 中世における商業、商人観について参照。大黒俊二、「『危険ユエニ説教スベカラズ』ーシエナのベルナルディーノにおける商業・商人観」、前川和也編著、『ステイタスと職業ー社会はどのように編成されていたかー』ミネルヴァ書房、1997年。
- (45) Carniani, *op.cit.*, p.257. Cherubini, *op.cit.*, pp.183-193. cf. Isaacs, cit.

- (46) Isaacs, *op.cit.*, pp.91-96. cf. A.Barlucchi, *Il contado senese all'epoca dei Nove. Asciano e il suo territorio tra Due e Trecento*, Firenze, 1997. S.Massai, *La Selva del Lago. Il bosco di Siena nel Medioevo*, Siena, 1998. 拙稿、「“中世の森”試論－13～14世紀におけるシエナの森、都市のよるその管理と利用について－」、『京都造形芸術大学紀要 [GENESIS]』第7号（2003年）、140～157頁。
- (47) Carniani, *op.cit.*, pp.215-216,223.
- (48) 前掲拙稿、「サリンベーニとトロメーイ」、14～17頁。
- (49) Carniani, *op.cit.*, pp.224-225.
- (50) *ibidem*.
- (51) *ibidem*.
- (52) Carniani, *op.cit.*, pp.38-39.
- (53) ID, *op.cit.*, p.224-225.
- (54) ID, *op.cit.*, p.213-215.
- (55) *ibidem*.
- (56) *ibidem*.
- (57) *ibidem*.
- (58) ID, *op.cit.*, p.217.
- (59) *ibidem*.
- (60) cf. Piccinni, *pref. cit.*
- (61) Carniani, *op.cit.*, p.217.
- (62) ID, *op.cit.*, p.216.
- (63) ID, *op.cit.*, pp.218-223.
- (64) *ibidem*.
- (65) *ibidem*.
- (66) *ibidem*.
- (67) *ibidem*.
- (68) Carniani, *op.cit.*, p.221.
- (69) *ibidem*.
- (70) ID, *op.cit.*, p.222.
- (71) *ibidem*.
- (72) ID, *op.cit.*, p.226-229.
- (73) *ibidem*.
- (74) *ibidem*.
- (75) *ibidem*.

- (76) *ibidem.*
- (77) *ibidem.*
- (78) *ibidem.*
- (79) *ibidem.*
- (80) Carniani, *op.cit.*, p.239.
- (81) ID, *op.cit.*, pp.240-245.
- (82) Castiglion d'Orcia, Piancastagnaio, Montegiovi, Boccheggiano, Rocca Tederighi, Montorsaio.
- (83) Carniani, *op.cit.*, p.246.
- (84) *ibidem.*
- (85) この反乱の時点だけをとらえるのではなく、14世紀後半から15世紀初めにかけてのいわゆる「党派」争いの中で、サリンベーニ（おそらく他のマニャーティも）は、ポポラーリの中に見いだすべき同盟相手として、常にドディチャーニを選ぶ傾向がある。cf. Isaacs, *cit.* Cherubini, *cit.*
- (86) Carniani, *op.cit.*, p.246.
- (87) *ibidem.*
- (88) ID, *op.cit.*, pp.241-247.
- (89) *ibidem.*
- (90) *ibidem.*
- (91) Carniani, *op.cit.*, pp.278-279. Isaacs, *op.cit.*, pp.83-84.
- (92) cf. Isaacs, *cit.*